

# 短期大学における「総合演習」の取り組みと評価

工藤 恭子・小田 進一

抄録：2010（平成 22）年度の「総合演習」を受講した学生の演習前後の行動変容の実態を明らかにする目的で、平成 22 年 4 月及び平成 23 年 1 月に学生 38 名（男子 7 名・女子 31 名）を対象にアンケートによる意識調査を行った。6 つの行動能力「積極性」「探求心」「協調性」「論理的思考」「観察力」「伝達力」に関して演習前後で自己評価をしてもらい、Fisher の直接確率法で検定を行った。その結果、行動変容が有意に認められた能力は「探求心」であった。学生は、ゼミ形式による集団および個人の研究という体験が学習動機となり、行動変容がみられた。このことから、教員が授業における達成目標を明確にするだけでなく、どのような能力を伸ばす事ができるかを明確にしながら学生と関わる事の重要性が示唆された。

## I . はじめに

本学短期大学部における「総合演習」の取り組み<sup>1)</sup>は 2001（平成 13）年に始まる。小グループによる自由課題研究として行われ、学生が自ら課題を見つけ、小グループの活動を経て、達成の方策を見つけ出すという自主的運営を基本とする。さらに、各グループリーダーが組織するリーダー会議により諸課題を克服し、「演習全体を学生自身が自ら運営している」という実感を持って取り組まれるよう、スーパーバイザーとして学生の主体的学びを励まし、援助を与えるよう各教員を位置付けた。これまでの総合演習を踏まえて、2010（平成 22）年度の「総合演習」に取り組んだ。

これまでの反省点として次の 3 点があげられる。

- 1) 学生が総合演習を通じて学ぶ内容をわかりやすく提示していなかった。
  - ① 学生自身の自由課題研究であるからこそ、研究モデルや目標の提示が必要。
  - ② 研究を進めるための方法論の指導が必要。
- 2) 学生の主体的取り組みと教員の指導体制との共通理解が明確でなかった。
- 3) 個々の学生の学びに対する指導体制が明確でなかった。

これまでの本学における「総合演習」について概観すると共に、これらの反省点を踏まえて取り組んだ本年度の「総合演習」の内容と実習前後に行った学生の自己評価を分析し、学生の行動変容の持つ意味と要点を把握したい。

### 1. 2001（平成 13）年当初の「総合演習」

**【目的】** 人類共通の課題や我が国の社会全体に関わる問題についての認識を深めると共に、自ら考える力を養い、幼児教育に携わる者としての資質の向上を図る。

**【内容】** 「21 世紀の幼児教育への展望と課題」として、① 21 世紀の幼児教育の基礎となる重要な事項について多角的に検討するために、今日の幼児教育に関わる問題や課題を発見し、課題探求の方法論を体験的に学ぶ。② ディスカッション、グループ運営などの具体的展開を体験習得する。

【方法】①学生のグループ毎の自主的な討議・研究を各学期末に発表する。②各研究に必要な講義やコメントなどの情報の提供を受ける。③各グループには、幼児教育学科教員が配置され、適宜指導を行うが、学生主導によるグループ運営、研究実践を基本とする。④各グループは、グループリーダー、サブリーダーを選出する。⑤各グループ共通の活動や情報提供などの連絡調整は、リーダー会議で行う。

【学生の自己評価項目】①自己の取り組み姿勢②テーマ設定の適切性③達成感④グループにおける自己の評価⑤グループ活動の内容の評価⑥一年間の体験についての所感

翌年以降の「総合演習」は、学生全員（1・2年生）が「保育フェスティバル」を企画実行するものとなっていった。

## 2. 「総合講座（保育フェスティバル）」

【目的】自ら考える力を養い、保育に携わる者としての資質の向上を図る。

【内容】保育に関わる問題や課題の発見を通して、自ら課題を探求し、体験的に学ぶ。

【方法】「保育フェスティバル」への取り組みを通して、実践的能力の養成を目指す。

- ① 学生の自主的な取り組みを主体とする。
- ② 教員が適宜指導を行うが、学生主導による運営を主体とする。
- ③ 学生の役割を決定する。
- ④ 連絡調整の会議を設ける。

保育フェスティバルにおいても、全体の計画や組織を学生の自主的運営で行い、各パート（スタッフグループ）のグループワークを中心とした演習であり、教員は学生の主体的学びを支えるという大きな位置づけは変わっていない。

## 3. 2010（平成22）年の「総合演習」

3ゼミ形式の授業を中心として、全体で受ける講義「研究方法」「ディスカッション」「プレゼンテーション」を経て、グループ発表と個人の論文作成を行うものとした。さらに、ゼミ横断の演習委員会を組織し、連絡調整や各ゼミの情報伝達を行った。

【目標】今日の「保育・子育て」についての多様な課題の中から、テーマ「子どもの現状」について教科の垣根を超えた視点で検討し分析することにより、保育現場で出会う様々な問題を解決する方法を学ぶ。

【学びの内容】①大テーマの中から自ら問題・課題を発見し、「観察・体験・聞き取り」「記述」「考察」という問題解決のプロセスを学ぶ。②自己の意見や他者の意見をまとめ、状況を的確に伝えるプレゼンテーション能力を獲得する。③自己の意見をのびのびと主張し、多様な意見の中から適切にまとめを引き出す「討論の主体としての自己」を発見する。

【各ゼミで取り組むサブテーマ】①「子ども・子育てはどう見られているか」②「大人と子どもの関係はどうなっている」③「いま、子どもの育ちの豊かさとは」の3点とした。

【方法】①各ゼミの取り組み

前期：総合演習テーマ「こどもの現状」及び研究方法、プレゼンテーション方法の学習を全体で取り組み、その後、サブテーマについて、演習グループごとに検討し、意見を出し合いつつまとめ、発表（中間発表）する。

後期：前期に発表した課題の中から、一人ひとりが自分なりの興味関心を一つのテーマに設定し、そのテーマの検討を演習グループの討議により深め、さらに観察・調査・聞き取り等の直接的な体験

(フィールドワーク)を通じてさらに分析を加え、研究論文としてまとめる。②学生の演習委員会は、各ゼミから選出された運営委員と編集委員で組織。

1. 各演習グループの学習内容を記録し、その都度まとめて公開する。
2. 演習グループ間の連絡及び情報共有を図る。
3. 中間発表、研究発表会の運営・開催する。

## Ⅱ . 研究方法

### 1. 調査対象者

本学短期大学部 2 年生 38 名 (男子学生 7 名、女子学生 31 名) を対象に質問紙調査を行った。

### 2. 調査期間

平成 22 年 4 月及び平成 23 年 1 月

### 3. 調査方法・内容及び分析方法

筆者が作成した質問紙を授業終了 10 分前に学生に配布し、その場で記入してもらい回収した。

演習前後の個人の比較のため、学籍番号・氏名の記載を依頼した。質問紙の内容は、演習前では、「研究に対するイメージ」「6つの行動能力に対する自己評価」「総合演習に対する思いの自由記載」、演習後では、「演習後の行動能力の自己評価」「総合演習後の学び及び自己の変化の感想」であった。統計処理には、SPSS16.0J 及びエクセル統計 2006 を使用し、分析方法には Fisher の直接確率法による検定を行った。

### 4. 倫理的配慮

授業前に、研究の目的・方法を口頭で説明した。演習前後の個人の行動変容を確認のため、学籍番号・氏名の記載を依頼した。協力は任意であり、成績には影響しない事、データの分析には個人が特定されないよう配慮し、研究目的以外には使用しない事を説明し、アンケート提出により調査の同意及び許可を得たものとした。

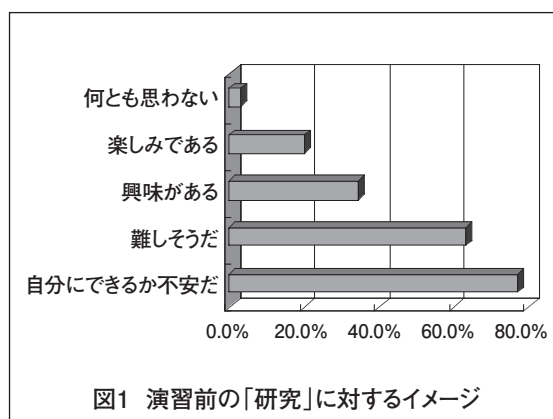
## Ⅲ . 結 果

演習前の回収数 (回収率) は 35 名 (92.1%)、演習後の回収数 (回収率) は 38 名 (100%) であった。

### 1. 演習前の「研究」に対するイメージ (n=35) (図 1) (複数回答)

「自分にできるか不安だ」「難しそうだ」「興味がある」「楽しみである」「何とも思わない」

の 5 項目から複数回答可で選択させた。最も多かったのは「自分にできるか不安」27 名 (77.1%)、次いで「難しそうだ」22 名 (62.9%) とネガティブな感情を半数以上の者が示していた。しかし、



反面、「興味がある」12名(34.3%)、「楽しみである」7名(20.0%)というポジティブな感情を示す者もいた。

## 2. 「総合演習」前後の学生の行動変容 (表1)

表1は総合演習前後の学生の行動変容を表とグラフにしたものである。

各項目に関して、「非常にある」「だいたいある」「普通」「少しある」「全くない」の5項目から自己評価を行ってもらった。

### ① 積極性

演習前 (n=35) で最も多かったのは「だいたいある」15名(42.8%)、次いで「普通」14名(40.0%)、「少しある」4名(11.4%)、「非常にある」「全くない」各1名(2.9%)であった。

演習後 (n=38) で最も多かったのは「だいたいある」20名(52.7%)、次いで「普通」14名(36.8%)、「非常にある」3名(7.9%)、「全くない」1名(2.7%)であった。「だいたいある」「普通」において演習前後で比較し、Fisherの直接確率法で検定した結果、有意差は認められなかった (p=0.6181) が、「非常にある」「だいたいある」が増加、「少しある」が減少傾向を示した。

表1 総合演習前後の学生の行動変容

		演習前	演習後	演習前後の行動変容
		n =35	n =38	
積極性	非常にある	1	3	
	だいたいある	15	20	
	普通	14	14	
	少しある	4	0	
	全くない	1	1	
探求心 *	非常にある	4	7	
	だいたいある	13	24	
	普通	17	6	
	少しある	0	0	
	全くない	1	1	
協調性	非常にある	2	4	
	だいたいある	17	18	
	普通	12	15	
	少しある	3	0	
	全くない	1	1	
論理的思考	非常にある	0	1	
	だいたいある	3	10	
	普通	22	22	
	少しある	8	4	
	全くない	2	1	
観察力	非常にある	2	2	
	だいたいある	12	17	
	普通	16	16	
	少しある	3	2	
	全くない	2	1	
伝達力	非常にある	0	2	
	だいたいある	4	7	
	普通	17	19	
	少しある	10	9	
	全くない	4	1	

## ② 探求心

演習前 (n=35) で最も多かったのは「普通」17名 (48.6%)、次いで「だいたいある」13名 (37.1%)、「非常にある」4名 (11.4%)、「全くない」1名 (2.9%) であった。

演習後 (n=38) で最も多かったのは「だいたいある」24名 (63.2%)、次いで「非常にある」7名 (18.4%)、「普通」6名 (15.8%)、「全くない」1名 (2.6%) であった。「だいたいある」「普通」において演習前後で比較し、Fisherの直接確率法で検定した結果、有意差が認められた ( $p=0.0073$ )。また、「非常にある」「だいたいある」が増加、「普通」が減少傾向を示した。

## ③ 協調性

演習前 (n=35) で最も多かったのは「だいたいある」17名 (48.5%)、次いで「普通」12名 (34.3%)、「少しある」3名 (8.6%)、「非常にある」2名 (5.7%)、「全くない」1名 (2.9%) であった。

演習後 (n=38) で最も多かったのは「だいたいある」18名 (47.4%)、次いで「普通」15名 (39.5%)、「非常にある」4名 (10.5%)、「全くない」1名 (2.6%) であった。「だいたいある」「普通」において演習前後で比較し、Fisherの直接確率法で検定した結果、有意差は認められなかった ( $p=0.8013$ ) が、「非常にある」「だいたいある」が増加、「少しある」が減少傾向を示した。

## ④ 論理的思考

演習前 (n=35) で最も多かったのは「普通」22名 (62.8%)、次いで「少しある」8名 (22.9%)、「だいたいある」3名 (8.6%)、「全くない」2名 (5.7%) であった。

演習後 (n=38) で最も多かったのは「普通」22名 (57.9%)、次いで「だいたいある」10名 (26.4%)、「少しある」4名 (10.5%)、「非常にある」「全くない」各1名 (2.6%) であった。「だいたいある」「普通」において演習前後で比較し、Fisherの直接確率法で検定した結果、有意差は認められなかった ( $p=0.1165$ ) が、「だいたいある」が増加、「少しある」が減少傾向を示した。

## ⑤ 観察力

演習前 (n=35) で最も多かったのは「普通」16名 (45.7%)、次いで「だいたいある」12名 (34.3%)、「少しある」3名 (8.6%)、「非常にある」「全くない」各2名 (5.7%) であった。

演習後 (n=38) で最も多かったのは「だいたいある」17名 (44.7%)、次いで「普通」16名 (42.1%)、「少しある」「非常にある」各2名 (5.3%)、「全くない」1名 (2.6%) であった。「だいたいある」「普通」において演習前後で比較し、Fisherの直接確率法で検定した結果、有意差は認められなかった ( $p=0.6090$ ) が、「だいたいある」が増加傾向を示した。

## ⑥ 伝達力

演習前 (n=35) で最も多かったのは「普通」17名 (48.6%)、次いで「少しある」10名 (28.6%)、「だいたいある」「全くない」各4名 (11.4%) であった。

演習後 (n=38) で最も多かったのは「普通」19名 (50.0%)、次いで「少しある」9名 (23.7%)、「だいたいある」7名 (18.4%)、「非常にある」2名 (5.3%)、「全くない」1名 (2.6%) であった。「だいたいある」「普通」において、演習前後で比較し、Fisherの直接確率法で検定した結果、有意差は認められなかった ( $p=0.7310$ ) が、「非常にある」「だいたいある」が増加し、「全くない」が減少傾向を示した。

### 3. 演習前後の自由記述（一部抜粋）

#### ① 演習前の「総合演習」に対する思い

- ・ 自分の意見だけを言うのではなく、他者の考えや意見を取り入れて自分の考えを膨らませ、それを今後どう活かしていけるか考えられたら良い。
- ・ 高校3年生の時、「地元」について調べました。調べて作ってまとめて発表したことがあります。全校の前で発表してやるまでは大変でしたが、終わった後はとても達成感があったので、今回も頑張りたいです。
- ・ とても楽しみです。色々な事を調べて自分のためや将来のためになれば良いと思います。頑張ります。
- ・ 難しそうだけど、研究をして論文を書けるように頑張ります。
- ・ 今までゼミ形式の授業を体験した事がないので、自分の成長に良い影響を与えられると思うので頑張ります。
- ・ 「ゼミ」と聞くと硬いイメージがあるので少し不安です。しかし、自分で調べ、自分でまとめるという事は、絶対自分にプラスになる事が多くあると思います。大変な事も悩む事もあると思いますが、それを経験して自信を付けていく事につながればと思います。
- ・ 皆と協力して頑張っていきたい。せっかくやるのだから、自分の力になるように取り組みたい。
- ・ 自分でわからない事を理解し、それを自ら解決したり学べるように頑張りたいです。皆で楽しく保育について学べたら良いと思います。

#### ② 演習を終えて学んだ事・自己の変化について

- ・ 最初、論文を書くと言った時、絶対に書けないと思っていました。実際に書いてみると、意外と書けた事に驚きました。インターネットだけではなく、沢山の本で調べる方法も身につき、様々な人の考えを聞き、自分の意見をまとめる能力もついたように思います。また、調べた中で、同じ意見や違う意見、本の著者によって様々なものがありました。虐待というテーマは奥が深く、調べても調べても疑問や、もっと深く調べたい事などが出てきて、きりがありませんでした。自分で調べる中で、疑問を解決する事、自分の知識を増やせる事に楽しさを感じるようになりました。今回、論文や発表の準備をする事で、何事にも探求心を持つようになりました。そして、研究するという事が難しいものではなく、身近なものであり、楽しい事だと思えるようになりました。
- ・ 総合演習を終えて、障がいについて新しい知識を見につける事ができたし、もっと知ろうと思う探究心も自分の知識を身につけるためには大切な事だと思いました。今回は障がいについて調べましたが、次は自分で子育て・保育について調べてみたいと思いました。発表の仕方もグループ毎に違ったので、自分でどの方法が一番わかりやすく伝えられるか考えたいです。
- ・ 総合演習では、前期からグループワークをしていき、一人一人が責任を持って役割をこなしていたので、とても良い結果が出たと思います。また、先生の力を借りて自分達で行った事もあったので、後期からの個人での学習がとてもやりやすく、自信にもなりました。また、興味を持った事に深く追求する事の楽しさも学ぶ事ができ、とても良い経験になりました。社会人になるにあたってとても良い勉強になったと思うので、今後活かしていきたいと思います。

### 4. 各ゼミの学生の研究テーマ（n=38）

#### ① 教員Kゼミ…テーマ「子ども・子育てはどのように見られているか」

「母親の子育てに対するストレスの解決方法」

「両親の育児休暇についての考え・意見」  
「母親の子育てサロンへの参加のきっかけ・感想の実態調査」  
「現代の父親のあり方」  
「母親の育児不安・悩みについての実態調査」  
「妊娠前後の悩み・不安」  
「子育て前と後の夫婦関係について」  
「母親の子育て不安・悩みの相談者と子育てサロンへの参加の関連性」  
「子育てと仕事の両立に対する制度のあり方」  
「子育ての楽しさについて」  
「子育ての不安や悩み、その解決法について」  
「両親の育児分担について」  
「父親の子育てサロンへの参加」

② 教員Hゼミ…テーマ「子どもとおとなの関係」

「保育に関わる障がい児への対応」  
「虐待防止への支援方法はあるのか」  
「障害者の雇用」  
「子育て支援と母親の必要性」  
「子ども虐待への対応」  
「保育者としての障がい児保育」  
「さまざまな発達障害と子どもたち」  
「異年齢保育」  
「子育てセンターと利用者について<子育ての現状>」  
「虐待の種類・要因・対応」  
「預かり保育」

③ 教員Oゼミ…テーマ「今、こどもの育ちの豊かさとは」

「食と幼児の虫菌について」  
「子どもの体力低下の実態について」  
「昔の遊び—今の遊びにどう繋がっているか」  
「インターネットの低年齢化について」  
「偏食の矯正法の今と昔—子どもと食育」  
「子どもの問題行動と食生活の関連性について—キレやすい子ども」  
「子どもの遊びと自然—子どもの遊びに対する大人のありかた」  
「食育とアレルギー」  
「伝承遊びの意義」  
「テレビゲームと子どもたち—子どもたちに与える影響」  
「食育の移り変わりについて—私たちが子ども達に伝えるべきこととは」  
「子どもの外遊びの減少と背景—外遊びの重要性」

## Ⅳ. 考 察

小田<sup>1)</sup>による平成13年度「総合演習」実施における反省を基に、今回の「総合演習」の授業展開がなされた。坂井<sup>2)</sup>は、「総合演習の捉え方」について、教員養成においても保育士養成においても「社会に対する課題の取り組みを解決しようとする学生への主体的な行動の資質を高める科目として設けられていることに違いはない。」と述べている。この「学生への主体的な行動の資質を高める科目」である演習を通して、「今日の保育・子育てについての多様な課題の中から、テーマ:子どもの現状について、科目の垣根を越えた視点で検討し、分析を加えることにより、保育現場において出合う様々な問題を解決する方法を学ぶ。」という今回の演習の到達目標は、演習後の学生の「自己の変化」の自由記述でもわかるように、ほぼ達成されたと考える。つまり、最初は初めての行動に対し、「不安」「困難感」を60%以上の学生が示していたが、反面、「興味」「楽しみ」などの関心を示した者が約30%いた。自由記述においても「頑張りたい」という感情が伝わるものであった。演習後は、1年間を通して、グループ及び個人で苦勞しながら行動してきた事による学生の成長は顕著であった。「大変だったが、充実していた。」「自分も少し変わったように思う」などの変化が述べられ、「行動変容」がみられた。それは、演習委員会を組織し、学生一人一人が「総合演習」の努力目標を意識し、役割意識や責任を持ちながら活動した成果だと考える。

一方で、その学生を指導していた教員にとっては、演習において学生のどのような能力を伸ばす事を意識して指導するかという教員側の教育スキルも求められていたように考えられる。本研究では、獲得するであろう能力を6項目に設定した結果、演習前後の変化で顕著に有意差が認められたのが、『探求心』であった。現代社会における子育てに関する問題が複雑化するに伴い、保育者に求められる能力も拡大されてきている。だとすると、学生のうちに主体的な行動がとれる「専門職業人」としての資質を養う機会をより多く準備する事は重要であると考ええる。演習で学生が獲得した『探求心』という能力は、社会で起きている様々な現象を自分に引き寄せ、興味・関心を持ちながら関わる事に繋がっていくであろう。その意欲や関心こそが、自立した専門職業人となるための基礎となると考える。

## Ⅴ. おわりに

時に教員のアドバイスを受けながらも、仲間と協力し、1つの事を成し遂げる、また、一人で全責任を持って1つの論文を完成させるという体験は、着実に学生の行動変容を導いたと考えられる。授業終了時、学生全員に「個人の成長」として、自己評価の変化をグラフにし、手渡した。

学生は卒業し、それぞれの道で活躍しているが、学生の時の体験が「保育者」として活躍する上での道標となる事を心から願ってやまない。今後の演習においても、教員一人一人が「学生の行動変容に関わる能力のあり方」を意識して教授していきたいと考える。

## 文 献

- 1) 小田進一：保育士養成課程における「総合演習」の取り組み。北海道文教短期大学研究紀要第26号：71-80, 2002.
- 2) 坂井 旭：「総合的な学習の時間」と「総合演習」の動向—パート2.「総合演習」ノート—。愛知江南短期大学紀要 32：69, 2003.



# The Approach and Evaluation of ‘Comprehensive Seminars’ at a Junior College

KUDO Kyoko and ODA Shinichi

**Abstract:** For revealing the actual result of behaviour modification associated with participating in ‘comprehensive seminars’, a total of 38 students (7 males and 31 females) were given an attitude survey in April 2010 and January 2011. The students completed the self-assessment both before and after the seminars to assess six behavioural traits: ‘assertiveness’, ‘curiosity’, ‘cooperativeness’, ‘logical reasoning’, ‘observational skills’ and ‘communication skills’. We analyzed the reports’ data using Fisher’s exact test, and as a result, found that the most significantly modified behaviour was ‘curiosity’. The students were motivated to learn because of the seminar format, which allowed them to experience individual and group research. This study emphasizes the importance for teachers to not only define goals and objectives within the classroom, but also to determine what behavioural traits they can strengthen through interacting with students.